さいわいな人

目次

一．人生の大事……一
一．二つの願い……二
一．戸を叩いておられる……三
一．心を頑にしてはならない……四
一．礼拝するありがたさ……五
一．神の峻厳と慈愛……六
一．近くに神はいます……七
一．何処に行っても……八
一．悪より救い出したまえ……九
一．神に逆らう者の道を歩くな……十
一．人生の一大事……一一
一．人間にとって最も良いのは……一二
一．喜んで事をなし
　なされた事を喜ぶ……一三
一．すぎたるは……一四
一．悪者の事に心を燃やすな……一五
一．魂を罠に落とすな……一六
一．我が身をどこに置くか……一七
一．神の呼びかけは
　今日さらに強く……一八
一．真実の言葉を語る方に
　出会おう……一九
一．香油を腐らせる愚か……二〇
一．息あるものこぞって……二一
一．慎みを持とう……二二
一．耳も知恵も口も目も手も足……二三
一．神の知恵を得るは
　財宝を得るにまさる……二四
一．柔らかな応答……二五
一．求道の人よ失望するな……二六
一．知恵に目覚めよう……二七
一．安定の在る人生……二九
一．感謝して拝するのみ……三〇
一．幸いな人……三一
一．熟慮と反省……三二
一．知恵が呼びかけている……三三
一．隠れた現実がある……三四
一．沈黙をもって聞く……三五
一．謙遜の知恵を……三六
一．自分を不覚省みる……三七
一．人の愚かは変わらない……三八
一．陰口を言う者……三九
一．足下に確かな命を観る……四〇
一．罪と罰

人生の大事

松下昌義

施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。物惜しみしない者は富み人を潤す者は自分も潤される。

―旧約聖書箴言十一章二十四節―

「吝嗇」という漢字があります。大字典によりますと、「吝」とは「恨みおしむこと」であり、それと関連して、惜しみ欲しがることを「吝貪」と言うとありました。また、「嗇」とは、「おしむ」「むさぼる」「やぶさか」とも読むとあり、その字源は「麦を蔵におさめて出さざること」だと言うのです。結局、「吝嗇」とは「よくばりでけち」と言うことになります。別な言い方をすると「典型的なエゴイスト」ということです。

×　×

人は誰でも利己的なところがあります。しかし、その利己的な自分に振り回される人と、利己的な自分を抑制し管理出来る人とがいます。本当に賢い人は、利己的な自分をよく管理できる人です。なぜなら、彼は人間の在り方の基本を弁えているからです。

欲張りでけちであることは誰でも出来ます。しかし、そのような自分を抑制し管理するには、賢い知恵と勇気が必要です。その知恵と勇気の源は愛です。愛をよく働かせる知恵と勇気を得ている者だけが、自分を上手に管理できるのです。

神さまは、この世のもの全てが互いに与え合う愛によって美しく成り立つ宇宙を創造されました。だからこそ、人を潤す者は自分も潤い富ますことが出来るのです。しかし、分かち与えるべきときに惜しんで与えず、ただ奪うだけで生きる者は、必ず自分を貧しくしてしまいます。貪欲のために狡猾に与える者も、奪う者と同じです。

×　×

「地に宝を積まず、天に宝を積みなさい」とイエス様は教えて下さいました。それは吝嗇な生き方をしないで、愛を持って生きなさいと言うことにほかなりません。

人生の大事は、いかにして自分の為に多くの富を集めるかではなく、いかにして自分に与えられた富を愛を持って使用するかということです。

人が最後に天にまで持って行けるものは、集めた分ではなく、愛をもって分かち合った分だけであることを、覚えておきたいと思います。

二つの願い

松下昌義

二つのことをあなたに願います。
わたしが死ぬまでそれを拒まないで下さい。
むなしいもの、偽りの言葉を　わたしから
遠ざけてください。
貧しくもせず、金持ちにもせず
わたしのために、定められたパンで、わた
しを養ってください。
飽き足りれば裏切り
神など何者か、と言うおそれがあります。
貧しければ、盗みを働き、わたしの神の御
名を汚しかねません。

―旧約聖書箴言三十章七節以下

これは人間を知り、自分がどのような者かを弁えている者の祈りです。彼は苦難の山河をいくつものり越えて来て、人生で大切なものは何か、ということに気づいたのでしょう。

なによりも、彼は神を畏れます。本当の安らぎが神の前にだけあることを知っているのです。

彼が神に祈り求める二つの有り様は、簡単な事でも、消極的な生き方でもありません。人にとって「足ることを知る」ためには、深い知恵と、強い意思が必要です。

×　　×

人は、飽き足りれば、傲慢になり、感謝も祈りも捨て、ますます貪欲になります。また貧しくなれば、盗みを働き、人生を呪い心は荒みます。人は貧しくても、飽き足りても、神や人や自分を裏切る者となる危うさを持つ者です。このような人間の愚かさを、彼は知っている故に、

二つのことをあなたに願います。
わたしが死ぬまで、それを拒まないでくだ
さい。

と祈るのです。

×　　×

箴言の記者は他の箇所でも、同じような祈りを神に捧げています。

稼ぎが多くても正義に反するよりは、
僅かなもので恵みの業をする方が幸い。

―十六章8節―

貧乏でも、完全な道を歩む人は
二すじの偽善の道を歩む金持ちより幸いだ。

―二十八章六節―

このように祈る人の内に、神に対する畏敬の念があることを忘れてはなりません。

戸を叩いておられる

松下昌義

見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。

―ヨハネの黙示録　三章二十節―

わたしたちの心の戸をたたいておられる方がいます。優しい思いやりをもって、人の心の戸を静かにたたいておいでになる方がいます。

不安な心に安心を、悲しみの心に慰めを、失望の心に希望を、惑うこころに落ち着きを、悔やむ心に平安を与えようとして、私たちの心の扉をキリストさまはたたいておいでになります。

×　×

警告のためではありません。押しつけがましくでもありません。親が子供に願うように、私たちの魂への思慕と愛情をもって、真の平安を与えようと、静かに心の戸をたたいておいでになります。

×　×

キリストさまのこの情景を画家ホルマン・ハントは、絵にしました。よく見ますと、キリストさまがたたく扉の外側には引手がありません。扉は内側からたげ開くことが出来るのです。

自分が心の戸を開こうとしないかぎり、だれも戸を開けることは出来ません。

×　×

人は感覚の欲望を満たしてくれるものに対しては、自分の心を全開し、貪欲にそれらを自分の内に取り込みます。しかし、心の平安は決して得ることはできません。それらは、感覚の満足です。自我の欲望の充足であって、自分の心の深みへの安心とはなりません。人は過ぎ去り、消えて行くものに自分を全開しますが、心を本当に安心で満たしてくれる真実には、自分の心を閉ざしてしまいます。

×　×

心身を静かに保つ時をもちましょう。自分の心が本当に求め願っているその声を聞くときをもちましょう。そのとき、こころの戸をたたいておられるその音が、聞こえて来るでしょう。

かたく閉じた自分の心の扉を開ける時、そこにキリストさまが立っておいでになります。そのとき、だれもが、

「友よ、安心しなさい。いつまでも一緒しましょう」というキリストの御声を聞くでしょう。キリストさまとの語らいのうちに、日々、慰めと勇気とをいただいて歩んで行きたいと願います。

心を頑にしてはならない

松下昌義

神に向かって喜びの叫びをあげよう。
御前に進み、感謝をささげ
楽の音にあわせて喜びの声をあげよう。
深い地の底も御手の内にあり
山々の頂も神のもの
海も神のもの、それを創られたのは神
陸もまた、御手によって形つくられた。
わたしたちを創られた方　神の御前にひざまずこう。
共にひれ伏し、伏し拝もう。

―旧約聖書　詩編九五篇―

神さまの内に生きている自分を知る。これこそ人間の知恵の始めであり、終わりであります。

知恵という漢字が、「恵みを知る」と書き表したのは、決して偶然ではありません。

恵みの最大の事は、命を与えられ生かされているという事であります。無償で一方的に恵み与えられている命、その命の主は自分ではなく、与えてくださった神であります。この詩の人は、それを深く知っているゆえに、神に向かって感謝と喜びの声をあげようと万物に呼びかけるのです。

神に向かって喜びの叫びをあげよう。
神の御前に進み、感謝をささげ、楽の音
あわせて喜びの声をあげよう。

×　×

人は人に感謝をしても、神に感謝しません。日々刻々、自分を恵み育みくださる神に人は感謝しません。神の恵みに無知なる知恵は、本当の知恵ではありません。目先の欲に振り回される知恵は、人を争いに導き、滅びに誘う知恵であります。

×　×

神の恵みを知り、その知恵を呼吸して生きる人の魂は神に祝福され、栄光から栄光へと聖天界まで導かれて行くでしょう。その人はすべてのものの内に神を観、楽しみに感謝を、苦しみに神をのぞみて祈りつづけ、ついに神に出会うでしょう。

わたしは神に養われる者
神の御手の内にある羊
あの日、心を頑にしたように
今日、こころを頑にしてはならない。

×　×

友よ、神を知る知恵で、日々呼吸して生きて行こう。そして、自分の魂を喜びと平安とで満たそう。

礼拝する ありがたさ

松下昌義

短く空しい人生の日々を、影のように過ごす人間にとって、幸福とは何かを誰が知ろう。人間、その一生の後はどうなるかを教えてくれるものは、太陽の下にはいない。

―旧約聖書コヘレトの言葉六章十二節以下―

× ×

歳を重ねる有り難さは、若い時に見えなかったことが、見えてくるということです。

歳を重ねることで見えてくる大切な一つは、この世だけが人生のすべてだと思い込んでいることの愚かさです。この世だけにしがみついて生きる人生は、結局、そのすべてが影のように空しく消え去ります。

人間は息に似たもの、彼の日々は消え去る影

―旧約聖書一四四編―

× ×

コヘレトは人生の空しさを嘆いているのではありません。この世に人生の意味や幸福を求めてもそこには何も無く全ては影のように消え去るだけだ、と教えているのです。それを「太陽の下にはない」と言ったのです。

× ×

この世からこの世を見ると、この世は影のように消え去る世界です。この世にだけしがみついて善だ悪だ、得だ損だ、偉い偉くない等と熱中して生きてきた者は、最後に人生の空しさを覚えて消え去るだけとなります。

しかし、神からこの世を見て生きて来た者は、自分の人生が、大いなる命に生かされて来た、とてつもない有り難い事であったと知るようになります。さまざまな人に出会わして頂いた。いろいろな仕事をさせていただいた。苦しみも悲しみも喜びも経験させていただいた。喜びも沢山いただいた。病もいただき、死ぬことさえ出来るようにしてくださる。さらに、死んでから後も明るみの世界で生かしてくださるのだ、ということを知るようになり、ますます希望に胸踊るようになるのです。

だからこそ、イエス様は次のように深い教えを示してくださっのです。

何よりもまず、神さまのお恵みの確かさを、自分が生きているその足下に見い出し、そのことを忘れないようにしなさい。

―マタイによる福音書六章二五節以下―

× ×

私たちは簡単に、この世に縛られ、この世の人生が自分の生きるすべてだと思い込んでしまいます。その結果、人生の最後にその空しさを知るようになり、影のように消え去ります。しかし、人生は栄光に満ちた命のたぎりの反映なのです。このような自分の人生の偉大さを気づかせていただけるのが信仰ということです。そこに自分を絶えず留まらせる行為が「礼拝」ということです。これが礼拝する有り難さであります。

神の峻厳と慈愛

松下昌義

神に従う人は、口に智恵のことばがあり、その舌は正義を語る。
神の教えを心に抱き　よろめくことなく歩む。
神に逆らう者は待ち構えて　神に従う人をあざ笑い殺そうとする。
神は御自分に従う人がその手中に陥って裁かれ　罪に定められることをお許しにならない。
神に望みをおき、神の道を守れ。神はあなたを高く上げて　地を継がせてくださる。あなたは逆らう者が断たれるのを見るであろう。
神に逆らう者が横暴を極め　野性の木のように勢いよくはびこるのをわたしは見た。
しかし　時がたてば彼は消え失せ　探しても見いだすことはできないであろう。

―旧約聖書　詩編三七篇―

神は働いておられる。神は見ておられる。神は感じ、聞いておられ、全てを知っておられます。

「神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者達に向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛に止まっているなら、あなたに向けられる。そうでないとあなたは切り取られる」と使徒パウロハ事実に基づいて明言しました。（ロマ十一・二二）

人間の歴史を見るとき、そこに神の働きが確かにあることを知る。しかし、人は眼の前に於いて神の正義を知り見ようと逸り、不信の罠に堕てしまう。神の正義は永遠の規模で確実に働いてる。誰も不義に対する神の怒りの手から逃れることはできません。

野性の木が生い茂るように不義がはびこるのを見る。誰も阻止出来ない勢いを見る。しかし、必ず神は裁き滅ぼされます。神の峻厳は生きても死してもその魂に及び永遠につづく。

× ×

神の名をもって己の欲望を満たそうとする劣悪な「宗教」が数多くはびこるこの世を見るときこそ、まことに神の峻厳と慈愛とを、正しく見る時でありましょう。

無垢で有ろうと努め、まっすぐに見ようとせよ。神を仰いで生きる人には平和がある。

近くに神はいます

松下昌義

神を呼ぶものの近く
まことをもって呼ぶすべての人の近くに
神はいます。
神を畏れる人々の望みをかなえ
願いを聞いて助けてくださる。

―旧約聖書　詩編一四五―

私たちのそばに神はおられます。助けを求めるすべての人、心から祈る人に、神は慈しみの御手をさしのべてくださいます。

この詩の人は、自分にとって神がどのような方であり、どこにおいでになるかを、眼の前に見ているように知っています。彼は本当に信仰の人です。彼は、未だ見えない神とその慈しみとを、信仰によって触れ、見ています。彼は、神を遠くに見るのでなく、自分のそばに見、その慈しみを直接に覚えて生きています。彼は、神と共に日々を生活してます。

× ×

信仰の人は、神の正さ、その慈しみの確かさを知っている故に、神に自分を委ねて生きます。

苦難の時も、悲しみの時も、不安の時も、神の慈しみが、そこに働いていることを信じていおり、その苦難や悲しみ、不安の中に、自分に対する神の隠れた御旨が働いていることを知っています。神は与え、神は取りたもうのであり、その業の内に、見えざる神の慈しみを知る楽しみのために、希望をいだいて耐え忍びます。

喜びも悲しみも、悦楽も苦難もすべて神の御手の内にあることを知っているのが信仰の人であります。

× ×

神は倒れようとする人をひとりひとり支え
うずくまっている人を起こしてくださいます。

神の道はことごとく正しく、
御業は慈しみをしめしています。
わたしの口は神を讃美します
すべて肉なるものは
世々限りなく聖なる御名をたたえます。

詩編一四五

神によりたのみ、神に希望をおく人は幸いです。自分の知恵、力、この世の富にだけより頼むものの道の最後は、失望とあきらめに終わります。

造られたものすべてが、神の慈しみを知り、感謝して生きることだか出来ますように。

何処に行っても

松下昌義

どこに行けば、
あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。
天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身をよこたえようとも、見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のなかに行きつこうとも、あなたはそこにいまし　御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

―旧約聖書　詩編一三九―

人には見えなくても、神は見ておられます。誰もいないと思っても、神は人の傍においでになります。神は、私たちの立つをも、座るのも知っておられます。

神はわたしが歩くのも伏すのも見分け、私たちの道にことごとく通じておられます。

私たちが天に登っても、死の陰府に下っても、神は、そこにおいでになります。

どの人も、神の前から離れることはできません。

人は自分のはからいによって生きているのではなく、神のはからいによって生かされている故に生きるのです。どの人にも生まれるに時があり、死ぬるに時があります。すべてが神の御計らいによるのです。

神の御計らいは　わたしにとっていかに
貴いことか。神よ、いかにそれは数多い
ことか。数えようとしても、砂の粒より
多く、その果てを極めようと思っても、
わたしはなお、神の中にいる。

―詩編一三九―

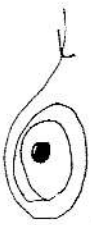
×　×

この詩の人は、人生の不思議を知っています。人生は自分の知識を超え、自分の計らいをはるかに超えたものの御手によっていることを、この詩の人は知っています。だからこそ、彼は神を畏敬します。だからこそ、さまざまな出来事がある人生を、彼は神に自分を委ねそこで安心するのです。

彼は祈ります。

神よ、わたしを究めてください。わたし
の心を知ってください。どうか、わたし
を、とこしえの道に導いてください。

彼のように祈りつつ生きて死する者こそ、最大の幸いな人です。



悪より救い出したまえ

松下昌義

二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまで、それを拒まないでください。

むなしいもの、偽りの言葉をわたしから遠ざけてください。

貧しくもせず、金持ちにもせず　わたしのために定められたパンで　わたしを養ってください。

飽き足りれば、裏切り　神など何者か、と言うおそれがあります。

貧しければ、盗みを働き　わたしの神の名を汚しかねません。

―旧約聖書箴言三十章七節以下―

これは、人生をよく知った人の祈りです。人が人としてまともに生きるための、最後の生きざまの何であるかを、この人はよく知っています。彼こそ信仰の知恵の保持者であり、人生を生きる達人であります。

人は消えて無くなる虚しい物や事のために苦労します。それを得ることが幸福をもたらし、安心へ通じる道だと信じています。

しかしそれらは一時の満足であっても、本当の安心にならず、最後の命の救いにもなりません。虚しきものに拠り頼む人生の最後は、悲しみと悔いだけです。

また彼は、偽りの言葉から遠ざけられることを祈ります。自分の利欲や見栄のために人は偽りの言葉を口にします。偽りの言葉で他人を欺き、自分を汚します。人はこのようにして、自分の地獄の墓穴を掘るのです。

×　×

人がどれほど愚かなものであるかを、自分自身の姿を通して彼はよく知っています。飽き足りれば、高慢になり、神の恵みを忘れます。また、貧しくなれば凶暴になり、愚かな者となり神を悲しませます。

それ故に、貧に惑わされず、富に溺れず、定められたパンに感謝して生きることができる者となるように彼は祈るのです。

×　×

この信仰の人の祈りに耳を傾けていますと、キリストさまが教えて下さった「主の祈り」を思い出します。

主の祈りの結びの言葉は「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」です。人生に於ける人の祈りは、この一言につきます。

神に逆らう者の道を歩くな

松下昌義

神に逆らう者の道を歩くな。
悪事をはたらく者の道を進むな。
それを避けよ、その道を通るな。
そこからそれて、通り過ぎよ。
彼らは悪事をはたらかずには床に就かず
他人をつまずかせなければ熟睡出来ない。
背信のパンを食べ、不法の酒を飲む。
神に従う人の道は輝き出る光
進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。
神に逆らう者の道は闇に閉ざされ
何につまずいても、知ることはない。

―旧約聖書箴言四章十四節以下―

悪とは神に逆らうことです。悪事をはたらくことは、神に反逆することであります。

わたしたちは、人と人との関係だけで善悪を考えます。そのとき、善悪は、その基準を失ってしまい、何が善で、何が悪であるか分からなくなります。ですから、悪事をなした者に「なぜ悪いのだ」と居直られるとき、人は答えに窮してしまうのです。

善悪は、人と人との関係に於いてあるのではなく、神と人との関係に於いて生じてくることなのだと、聖書は教えます。

神は人の目には見えません。見えないものだからこそ、それは真実なのであります。見えるものはすべて一時であり、やがて消えて無くなり、確かなものとはなりません。

× ×

人の最後の拠りどころとなるのは「祈り」です。見えるものにだけ頼ってこの世を生きて来た人が、最後に至る安心は、目に見えない方への「祈り」によって得るのです。

目に見えるこの世を、人が生きるのは、目に見えない神を知るためであります。その神を知ることこそ知恵の初めであり、そういきることで善を知り、喜びを得、人生は完成するのです。

× ×

神に従う人の道は神へ至る道であり、その道を歩む者は、進むほどに光を増し加えられ、その命は遂に、栄光に輝かせていただくのです。それは目に見えない神との関わりに於いて起こっているのです。

× ×

神を畏れて生きる人になろう。神を仰ぎ神を喜こんで日々を生きる者となろう。

人生の一大事

松下昌義

若き日にこそ、あなたの創造主に心を留めよ。苦しみの日が来ないうちに。「歳を重ねることに喜びがない」という年齢にならないうちに。太陽が闇に変わらないうちに。月や星の光が失せないうちに。雨の後にまた雲がもどってこないうちに。

その日には、家を守る男も衰え、力ある男も身を屈める。粉ひく女の数は減っていき、失われ、窓から眺める女の目は霞む。鳥の声に起き上がっても、歌の節は低くなる。人は高い所を恐れ、道にはおののきがある。人は永遠の家に去り、泣き手は町を巡る。白銀の糸は絶たれ、黄金の鉢は砕ける。泉のほとりに壺は割れ、井戸車は砕けて落ちる。塵はもとの大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。何と空しいことか、とコヘレトは言う。すべては空しい、と。

―旧約聖書コヘレトの言葉十二章三節以下―

× ×

「コヘレト」、それは「会衆の中にあって語る者」のことです。彼はキッパリと言います。すべての人は老い、結局、何も得ることなく消え去る、人生の一切は空しい、と。これは誰も反論出来ない人生の事実です。

コヘレトは人生を虚無的にとらえているのではない。彼は、人生がそうであることをよくよく看よ、と呼びかけているのです。歳を重ねるごとに喜びがない、とつぶやく哀れな老人にならないために備えよ、と呼びかけるのです。

× ×

旧約聖書は言う。「我らが、すべての歳を尽きるは一息の如し、我らが歳を経る日は七十才にすぎず、あるいは健やかにして八十才にいたらん。されどその誇るところは、勤労と悲しみとのみ、その去り行くこと速やかにして、我らもまた飛び去れり。我らに、己が日を数えることを教えて、智恵の心を得させてください」（詩編九十篇）また日蓮は言う。「人の寿命は無常なり。出づる息は入る息を待つことなし。風の前の露、なお譬えにあらず、貴きも、卑しきも、老いたるも、若きも、定めなき習いなり、されば先ず、臨終のことを習うて後に他事を習うべきなり」（妙法尼御前御返事）

× ×

人はすべて、先ず臨終（死）のことをよく知って後、他の事を行うべきでありましょう。またこの世の生の無常迅速なる現実をよく弁える智恵を身につけて後に、今今を一生懸命に生きるべきでありましょう。

これらの事をコヘレトは「若き日にこそ、あなたの創造主なる神にこころを留めよ」と言ったのです。これは理屈のことではなく、自分の人生の一大事なのです。

人間にとって最も良いのは

松下　昌義

人間にとって最も良いのは、飲み食いし自分の労苦によって魂を満足させること。しかしそれもわたしの見るところでは神の手からいただくもの。自分で食べて、自分で味わえ。

―コヘレトの言葉二章二四節以下―

これは、人生の意義をたずね続けたコヘレトが最後に到達した境地であります。

若いときは、あれも、これもと思います。また肩肘張って議論し、多くの理屈をならべたて、善だ悪だと批判します。また、他人と比べて勝った負けたと、ときに誇り、ときに落胆します。さらに損だ、得だと騒ぎ立てます。

コヘレトもさまざまなものを熱烈に求め、多くの財産、地位、名誉を得ました。しかし、彼に残ったのは「空しさ」だけでした。そして、ついに到達したところが冒頭に掲げた境地です。

×　　×

このようなコヘレトに接して、「日々是好日」という雲文禅師の言葉（碧巌録第六則）を、ふと思い、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言う。栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さる」というイエスのお言葉（マタイ福音書6章）がそれにかさなり、さらに「今や、恵みの時、今が、救いの日」と言うパウロの言葉が胸に響いてきます。（コリントII6章）

×　　×

この世のすべてが夢であり幻に過ぎないことに本当に気づいた者は、その極みで神の恵みあふる命の滾りに出会うのです。「そうなのだ。何も思い悩むことはないのだ」ということに気づくのです。

感覚の満足ではなく、また知識の満足でもありません。自分の魂の満足が必要なのです。それは生きていることの喜びであり感謝です。朝に起き昼に働き、夜に寝ることの有り難さ。食事をなし排泄が出来る有り難さ。太陽が東に昇り西に沈む有り難さ。風が吹き雨が降る有り難さ。人が生まれ死ぬことの有り難さ。これらすべてが神さまの恵みの手の内の有り難き出来事です。まさに「日々是好日」です。「今は恵みの時、今が救いの時」なのです。だからこそイエスは、花を指さし、とりを指さし、私たちを指さし、「それぞれ、神の恵みが滾り溢れているではないか。看よ、看よ」と言われるのです。まさに、「神に望みをおく人は新たにされ、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」（イザヤ書四十章三十一節）

喜んで事をなし なされた事を喜ぶ

松下昌義

わたしは知恵を深めてこの地上に起こることを見極めようと心を尽くし、昼も夜も眠らずに努め、神のすべての業を観察した。まことに太陽の下に起こるすべてのことを悟ることは、人間には出来ない。人間がどんなに労苦し追及しても、悟ることはできず、賢者がそれを知ったと言おうとも、彼も悟ってはいない。

―旧約聖書コヘレトの言葉八章十六節以下―

× ×

わたしは、一個の旅人、地上の巡礼にすぎない、あなたはそれ以上の者か。とある人が言いました。たしかに、私たちは、この世にあっては旅人であり、一人の巡礼にすぎません。旅人は、留まる所をもたずに、旅をつづけるものであり、巡礼も、安らぎを求めて歩みつづけるものです。

× ×

人生とは、ひたすら歩みつづける旅です。人はさまざまな出会いを得て喜び、哀しみ、奢り、悔やみ、怒り、悩みます。そうすることで多くの事を学び知ります。しかし、どれほどの出会いを得、歳を重ねても、人生はいつも不思議の中につつまれています。

また、人生にはさまざまな離別があります。離別は多くの場合哀しみがともないます。人は、離別を通して、人間の出会いの不思議に気づかされます。そしてどの人も、やがて自らのこの世の人生と離別して行きます。まことに「人生は彩られた影の上にある」と言えましょう。

× ×

人生を見極めようとすることは愚かなことです。見極めたと思う人は最も愚かな者です。人生の不可思議を知るものだけが、人生を謙虚に生きるものとされ、世の中を知るものだけが、世の中を軽蔑しなくなります。誰にも人生の深淵さは理解できない故に、人生は素晴らしいと言えましょう。

× ×

どの人の人生も、その人の手の内にはありません。だから、どの人にとっても、自分の人生は不可思議なのです。

どの人の人生も、かけがえのないただ一つのものです。無数にある人生の一つが、自分の人生ではありません。どの人も、自分の負い目を背負って生きる事を促されて、この世に送りだされ、遣わされて来た者です。

× ×

生活することは、自分の外に向かって闘うことです。しかし、喜びを持って生活するためには、自分の内に向かって問うことが必要です。自分の内に躍動する不思議な命の語りかけに耳を傾けることを忘れてはなりません。それは自分の命の主人の声です。「喜んで事をなし、なされた事を喜びなさい」。その声はささやいています。そのように生きる人の人生は平安です。

すぎたるは

松下昌義

善人すぎるな、賢すぎるな、
どうして滅びてよかろう。
悪事をすごすな、愚かすぎるな、
どうして時も来ないのに死んでよかろう。
一つのことをつかむのはよいが、
ほかのことからも手を放してはいけない。
神を畏れ敬えば、
どちらも成し遂げることができる。
―旧約聖書コヘレトの言葉七章十五節以下―

×　×

諺に、「すぎたるは猶及ばざるが如し」とあります。何事でも、度を過ぎたのは、足らないのと同じでよくない、と言うことです。例えば、いくら良い事でも度ををすぎると害になる。薬もすぎれば毒となります。

何事をするにも程々ということがあります。しかし、「ほどほど」とは「あいまい」という無責任さを言うことではありません。

×　×

程々とは、その場、その時に、最も適切で妥当なこと、と言うことです。とすれば、ほどほどである、ということはとても難しいことです。

ですから、物事をあまりにも「杓子定規」に、つまり、何でも、いつでも、同じ基準や考え方で物事を判断し、処理しようとして、融通の利かない、善人すぎる人、賢すぎる人は、そのことにより自分も周囲にいる人達も困らせ、滅ぼして仕舞うことがあります。

人は時として悪人であり、愚か者でありますが、その度を弁えず，反省することを忘れると、自分で死と滅びとを招くことになりましょう。

人が何事かにつまづくのを見ていますと、スピードを出しすぎて走る自動車が事故を起こし、自分の命を失う様に似ています。その人は、最も適切で妥当な走りをしなかったからです。

×　×

中国の古典の一つに「中庸」という書物があります。その冒頭に、「偏らざるをこれ中と言い、易わらざるをこれ庸と言う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」とありますが、要するに「ほどほど」とは「中庸」であり、中庸とは自然の定理であると言うのとです。

×　×

コーヘレトは次のようにも語っています。

正義を行う人も悪人も神は裁かれる。
すべての出来事、すべての行いには、定められた時がある。
―コヘレトの言葉三章十七節―

神さまを信ずるとは、神を畏れ敬うことです。それは、自分の生きる、その場、その時に、最も適切で妥当な深い深い智恵を神からいただくことであります。決して、自分の智恵を誇り賢そうに、又は、自分の欲に振り回されて愚かに動く事ではありません。それは、浅はか、と言うものです。

悪者のことに心を燃やすな

松下昌義

悪者のことに心を燃やすな
日ごと、神を畏れることに心を燃やすがよい。
確かに未来はある
あなたの希望は断たれることはない。
―旧約聖書箴言二三章一七節―

何時でも何処に於いても悪事はあり、悪事をなすものが富み栄え、奢り高ぶっていることを見ます。

死ぬまで彼らは苦しみを知らず、だれにもある苦労すら彼らは知らない。
傲慢を首飾りとなり　不法は衣となって
彼らを包む。
目は脂肪の中から見まわし　心には悪巧みが溢れる。
そして彼らは言う。
「神が何を知っていようか」と
見よ、これが神に逆らう者。
―詩編七三篇―

×　×

しかし、これら悪者のことに心を燃やすな、と箴言は言い、詩編は、悪事を謀る者のことでいらだつな、と言います。

私たちは、悪事を行っている者を批判し裁くことに熱心になり、人と寄ってはその話題に時間を費やします。だが、そこから生まれて来るものは憎しみや憎悪であり、ときとして嫉妬さえ起こってきます。だが、そうすることによって、人は自分自身の魂を汚してしまうことに気づかない。だから、悪者のことに心を燃やすな、いらだつな、怒りを解き、憤りを捨てよ。ましてや、自分も悪事を謀ろうなどと思うな、と箴言は教えます。

×　×

悪事を謀る者のことに心を燃やすエネルギーがあるなら、神を畏れることに、あなたの心を燃やしなさい　と箴言は勧めます。本当の未来はその人にあり、希望はその者だけにあるのです。
悪事に憤りを覚えるより、神の前に悪事のゆるしを祈ろう。
神は生きておられる。神は見ておられる。神は知っておられる。神は感じておられる。神はすべてに相応しい応えをもって報われます。

魂を罠に落とすな

松下昌義

弱い人を搾取するな、弱いのをよいことにして。貧しい人を法廷で踏みにじってはならない。神は彼らに代わって争い、彼らの命を奪う者の命を、奪われるであろう。

怒りやすい者の友となるな。
激しやすい者と交わるな。
彼らの道に親しんで、あなたの魂を罠に落してはならない。

―旧約聖書箴言二二章二二節以下―

箴言は人生の達人たちが、人の世を歩む者達に向かって、愛情をこめて差し出した贈りものであります。

耳を傾けてその言葉を聞き。その知識に心を向け、その言葉を腹に納め、すべてを自分の唇に備えておくものは、必ず喜びを得るでしょう。

× ×

自分の欲の為に弱者を搾取し、貧しい者を不法に取り扱ってはならないとういい。神はかならずそれを見、それに相応しい報いを与えられると警告しています。

神を見失った世界は暗黒であります。表面的に美しく飾られていようとも、その中身は腐敗と汚毒に満ちています。

しかし、耳を人に与えた神は聞いておられる。目をあなたに造った神は見ておられる。人間に知識を与えた神は全てを知っておられる。人が神ぬきで計った計画が、最後にはすべて空しくなる。神を忘れた人の誇りはすべて一時のもの、無かったかのように、夢のよにう消えてしまう。

× ×

自分の欲望が満たされぬとき、すぐに怒る者を友とするな。ことにあたってすぐに激する者を友にするな。彼らには謙虚さはなく、耐えることを知らず、自分の姿を省みない者である。彼らに有るのは、ただ自分のみ。

× ×

常に神を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば神はあなたの道筋をまっすぐにされる。

―箴言三章六節―

自分の身をどこにおくかに気をつけよう。人はその身を置いたところの色に染まるのですから。

神なき者の道に親しんで、あなたの魂を罠に落とすことのないように気をつけよう。

我が身を どこに置くか

松下昌義

知恵ある者と歩けば知恵を得
愚かな者と交われば災いにあう。
（旧約聖書箴言十三章二十節）

「一人の人間のすべてを知りたいと思うなら、彼の友が誰であるかを尋ねよ」とはユダヤ教のラビ（教師）の言葉です。これに類したことわざはどこの国にもあります。

たしかに人は自分の身の置くところによって感化され、置いた処の色に知らぬうちに染まってしまうものです。「朱に近づけば赤く、黒に近づけば黒し」「人は善悪の友による」さらに「朋友は第二の我」。ほんとうにそのとおりだと思います。

× ×

しかし、「箴言」が語るそれは、世間の常識程度の教訓ではなく、神の恩恵を知る知恵を人が失ってしまわないための配慮によるものです。例えば、

怒りやすい者の友になるな。
激しやすい者と交わるな。
彼らの道に親しんで
あなたの魂を罠に落としてはならない。
（箴言二二章二四節）

神に逆らう者の道を歩くな。悪事を働く者の道を進むな。……それを避けよ、その道を通るな。そこからそれて、通り過ぎよ。……神に従う者の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の光となる。神に逆らう者の道は闇に閉ざされ、何につまずいても、知ることはない。
（箴言四章一四節以下）

× ×

神の恩恵を知る知恵は、人間の霊魂の救いに導く「智慧」にほかなりません。

銀を求めるように知恵を尋ね、宝物を求めるようにそれを捜すなら、あなたは神を畏れることを悟り、神を知る知恵を得る。
（箴言二章四節以下）

今の世は賢きも愚かも共に神を見失った人々で満ちています。何につまずいても神に目覚めることはなく人を恨み時代を嘆くだけで、空しく朽ち果てていきます。どの人もそのような知恵なき者になってはなりません。自分の身を何処に置くかは、人に課せられた最も大きい責任です。

神の呼びかけは今日、さらに強く

松下昌義

教えに従って知恵を得よ。それを拒むな。
わたしに聞き従う者、日々、わたしの扉をうかがい、戸口の柱を見守る者は、いかに幸いなことか。
わたしを見いだす者は命を見いだし、神に喜び迎えていただくことができる。
わたしを見失う者は魂をそこなう。
わたしを憎むものは死を愛する者。
―旧約聖書箴言八章三三節以下―

知恵はひとりでに身につくものではありません。誰かとの関わりに於いて得るものです。まして神についての知恵は、信仰に生きる者の教えを通して得られるのです。

知恵は、その人の人格の基礎となり、人の生き方となって実を結びます。

×　×

真実の知恵を与える神の座を日々伺い、その思いをその戸口に向けている者は幸いであります。なぜなら、その人は大いなる命を見いだし、神に喜び迎えられ、その霊魂を損なうことなく永遠の祝福に与かることができる人生を過ごすことになるからです。

×　×

人の多くは、滅びに行くこの世の知恵を得ることに熱心になり、それを与える門の戸口に向かって群がります。しかし、その霊魂は七十才で滅び八十才で空しく消え去る。しかし、その現実を知る人はいません。

×　×

神からの知恵をいただくことは、この世を思慮深く生きる知識となり、苦難と災いに対して対処出来る力と希望とを与えられる。彼は倒れてもなお倒れず、悲しんでもなお悲しまず、死んでも死なず、必ず立ち上がらされ栄光に生きつづける者として守られます。

×　×

人よ、あなたたちに向かってわたしは呼びかける。人の子らに向かってわたしは声をあげる。浅はかな者は熟慮することを覚え、愚かなものは反省することを覚えよ。
神のまことの知恵は真珠にまさり、どのような財産にも比べることはできない。
―箴言八章四節以下―

神の呼びかけは今日、さらに強められています。

真実の言葉を語る方に出会おう

松下　昌義

耳を傾けて賢人たちの言葉を聞け。
わたしの知識に心を向けよ。
それをあなたの腹に納め、ひとつ残らず唇に備えておけば喜びを得る。
――旧約聖書箴言二二章一七節以下――

人が幼いときから、どのような人に関わり、なにを見せられ、なにを聞いて来たかということは、その人間の生き方を決定します。

この世の知識を多く身につけ、世間ではその肩書の故に「偉い方」といわれるている人に、「この人はどのような大人に育てられてきたのだろうか」と不安を感じるほどに、浅薄な人がいます。

浅薄な人とは、真実に対する深い洞察力に欠けている人のことです。真実に対してまったく求道の心が欠落している人のことです。自分の利害得失についてはよく考えても、真実を求めて深く考えようとしない人です。また、深く自分を省みることをしない人のことです。さらに浅薄な人とは、傲慢で愛に欠ける人のことです。

×　　×

「耳を傾けて賢人たちの言葉を聞け」「わたしの知識に心を向けよ」と箴言の著者は言います。「賢人」「わたし」とは神の言葉を指しています。神の言葉とは、真実の言葉ということでしょう。

いつの時代にあっても、真実の言葉を語って聞かせてくれる人は多くはいません。この世についての論者は多くいても、人間の霊魂の深くまで到り、聖め、大安心を与え、心を燃やし永遠の希望につづく真実を見せてくれる人、まことにまことに少ないものです。

×　　×

「牛は牛づれ馬は馬づれ」ということわざがあります。牛は牛に、馬は馬に共感し同調するだけです。この世人間はこの世のことにのみ共感し同調し、たがいに同類相集まるだけで、真実には目も耳も傾けず、かえって笑いとばすだけです。

×　　×

この世の言葉を聞き分ける耳を持ちたいと思います。自分の霊魂を永遠に光輝かせる言葉を語るお方に出会うことは、この世に生まれた者のただ一つの特権であります。

香油を腐らせる愚か

松下昌義

智恵は武器にまさる。
一度の過ちは多くの善をそこなう。
死んだ蠅は香料作りの香油を腐らせ、臭くする。
僅かな愚行は智恵や名誉より高くつく。
―旧約聖書コヘレトの言葉九章十八節以下―

智恵とは、たくさんの知識を持つことではなく、事柄を正しく分析し、真に問題が何処にあるかを深く洞察して、明日を見通すところにあります。

与えられたものを、そのままに鵜呑みするところには智恵は働きません。また、人々の人気を得るために事を運ぶところにも智恵はありません。目先の損得にふりまわされて事を起こすところに智恵はありません。また、独善を振り回す独りよがりのそこにも智恵はありません。ましてや自分の欲望満足のために策を練り、事を運ぶとこは真の智恵とは言えないでしょう。

×　×

武器は破壊と恐怖、多くの怨念を生み出すだけです。しかし智恵は創造と平安、愛と希望とを生み出します。

×　×

智恵の無い言葉や行いは折角の良き業を破壊し明日を暗くするのみです。しかし、当の人は、自分がなしたことの愚かに気づきません。

×　×

たしかに、一度の愚かな言動は多くの善をそこないます。それは、死んだ蠅が、香料作りの香油を腐らせ、悪臭に変えてしまうのと同じです。

×　×

かって多くの民が、その国の智恵なき指導者の愚かさによって、破壊と悲惨とを被って来ました。現在も同じ悲惨が性懲りもなく繰り返され、善良な民の嘆きが世界のここかしこから聞こえて来ます。

×　×

わたしはまた太陽の下に、智恵について次のような実例を見て、強い印象を受けた。

ある小さな町に僅かの住民がいた。そこへ強大な王が攻めて来て包囲し、町を滅ぼすための高い砦を築いた。

その町に一人の貧しい賢人がいて、智恵によって町を救った。しかし貧しいこの人のことは、だれの口にものぼらなかった。それでわたしは言った。

智恵は力にまさるというが
この貧しい人の智恵は侮られ
その言葉は聞かれない。
―コヘレトの言葉九章十三節以下―

×　×

イエスの言葉も、智恵無き指導者達と愚かな群衆の叫びによって消されてしまいました。

息あるものこぞって

松下昌義

ハレルヤ　神を賛美せよ
聖所で　神を賛美せよ
大空の砦で　神を賛美せよ
力強い御業のゆえに　神を賛美せよ
大きな御力のゆえに　神を賛美せよ
角笛を吹いて　神を賛美せよ
琴と竪琴を奏でて　神を賛美せよ
太鼓に合わせて踊りながら　神を賛美せよ
弦をかき鳴らし笛を吹いて　神を賛美せよ
シンバルを鳴らして　神を賛美せよ
シンバルを響かせて　神を賛美せよ
息あるものはこぞって　主を賛美せよ
ハレルヤ

―旧約聖書　詩編一五〇篇―

旧約聖書の詩編はすべて祈りであります。祈りは、神をほめたたえることにおいて完成いたします。その意味で、神の賛美に満ちる祈りで全詩編を結んでいるこの詩は、まことに詩編に相応しいものです。

静かに手を合わせ、この祈りをこころの内に称えるとき、それに重ねるように、新約聖書黙示録四章にある「天上の礼拝」で天使たちの賛美の声が響いてまいります。

聖なるかな　聖なるかな　聖なるかな、
全能者である神、主、
かっておられ、今おられ、やがて来られる
方、
主よ、私たちの神よ、
あなたこそ、
栄光と誉れと力とをうけるにふさわしい方、
あなたこそ創造者、保持者、完成者でいら
っしゃいます。

本当にそのとおりだと信じます。この全宇宙で栄光と、誉れと、力とを受けるに相応し方は、神御自を他にして誰もありません。この世でどれほと偉大だと言われる者も、限りある儚く卑しきものです。すべては一夜の夢、愚かな虚構、悲哀に満ちたピエロにしかすぎません。

この現実を知り尽くしているからこそ、この詩の人は、天地に響けとばかりに、「神をこそほめたたえよ」と詩うのです。この信仰の知恵に立つ者だけが、儚き現実に生きる勇気を得ることができるのです。

息あるものはこぞって、神を賛美せよ。

慎みを持とう

松下昌義

わたしに与えられた恵みによって、あなた方一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えて下さった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

―ロマの信徒への手紙一二章三節―

×　×

もっとも醜いことは高慢です。聖書はたびたび人が高慢になることを戒め、そして、慎み深く在るように勧めています。

×　×

人の高慢は、自分を過大に評価するところから生まれてきます。私たちは自分自身を正しく評価しなくてはなりません。そうすることが「慎み」と言うことです。

でも、私たちはつい、慎みを忘れて自分を過大に評価し高慢になります。

×　×

人は自分自身を正しく評価できません。それは、自分の姿を自分自身で直接眺めることが出来ないからです。鏡に映して眺めている自分は結局、自分の思いで眺めている自分なのであって、決して正しく自分を眺めているとはいえません。

自分の姿は自分よりも他人の方が正しく眺めています。なぜなら、私たちはいつも他人様から眺め回されているからです。

さらに、眺める他人が考え方や、情熱を異にする場合の方が、判定者としてしばしばより正しいことがあります。

しかし、もっと正しく私たちを眺め判定しておれる目があります。それは神です。

主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる。座るのも立つのも知り、遠くからわたしの計らいを悟っておられる。歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる。わたしの舌がまだ一言も語らぬ先に。主よ、あなたは全てを知っておられる。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らしだす。…ご覧下さい私の内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしを永久の道に導いてください。

―詩編一三九編―

私たちの本当の慎みは、神の目に気づくことによって安心の内に生まれて来るのです。

耳も知恵も口も、目も手足も、

松下昌義

わが子よ、わたしの言葉に耳を傾けよ。
見失うことなく、こころに納めて守れ。
それらに到達するものにとって、それらは
命となり、全身を健康にする。
何を守るよりも、自分の心をまもれ。そこ
に命の源がある。曲がった言葉をあなたの
口から退け、ひねくれた言葉を唇から遠ざ
けよ。
目を真っ直ぐ前に注げ。あなたに対してい
るものに、眼差しを正しく向けよ。
どう足を進めるかをよく計るなら、あなた
の道は常に確かなものとなろう。
右にも左にも偏ってはならない。悪から足
を避けよ。

―旧約聖書箴言四章二〇節以下―

自分の耳を何に向け何にを聞くか。自分の心を何に向けいかに洞察するか。自分の口で何を語るか。自分の目が何を見ているか。自分の足を何処に向け歩を進めるか。これによってその人の人生は決定されます。

耳は天の声を聞いているでしょうか。この世の声のみを聞き、それに惑わされているだけではないでしょうか。

心に何を蓄えているでしょうか。尽きない喜びが蓄えられているでしょうか。愚痴、不満、批判、攻撃、嘲り、憎しみ、情欲、見栄、高慢だけが潜んでいるのではないでしょうか。深い霊的洞察力が蓄えられてあるでしょうか。

口からどのような言葉を出しているでしょうか。表面的な空しい言葉が交わされ、やがて滅び行く事をめぐって人と人とがさも賢そうに語っているだけではないでしょうか。祈りの言葉を口にしているでしょうか。

目は鋭く畏敬の思いをもって神を見上げているでしょうか。空しいものを見つめることで満足し、目前のことに惑わされているだけではないでしょうか。

足は天に向かって歩いているでしょうか。結局、すべて虚無のなかに消え去る事柄に向けて歩をすすめているだけではないでしょうか。

自分の為だけでなく、神の栄光をあらわすため、天に宝を積み上げるために、耳も知恵も口も、目も手足も用いようではありませんか。それだけが最後に残るものです。

神の知恵を得るは
財宝を得るにまさる

松下　昌義

いかに幸いなことか。知恵に到達した人、英知を獲得した人は。
知恵によって得るものは、銀によって得るものにまさり、知恵によって収穫するものは金にまさる。
真珠より貴く、どのような財宝も比べることはできない。
右の手には長寿を、左の手には富と名誉をもっている。
知恵の道は喜ばしく、平和の内にたどって行くことができる。
―旧約聖書箴言三章十三節以下―

知恵とはこの世の知恵でなく、神を知る知恵のことです。この世の知恵を得ることに人は熱心でも、神の知恵を得ることには、人は無関心です。それは、神の知恵のなんたるかに、人が気づいていないからです。

×　　×

この箴言の人は、神の知恵がどれほどのものかを知っています。彼は、神の知恵を見いだしそれを深く悟って生きている人は「いかに幸いなことか」と感嘆の声を挙げています。

彼は大いなる喜びをもって生きています。安心と希望とを持って生きています。自分の人生の現実がどのようであっても、力強く立ち上がって活き活きと命を燃焼出来る生き方をしています。その様子を、神の知恵を得ることは銀を得ることより、金を持つことよりもまさると断言し、どれほどの財宝も神の知恵を得ることには比べられないと言います。

×　　×

神の知恵は「右の手に長寿を得しめる」と彼は言います。それは、神の偉大なる御守りの内に生涯生きる事が出来る安心のことです。又、「左の手には富と名誉を得る」と言います。それは、物との関わりにも、心の働きに於いても、神の祝福を受けると言うことです。

×　　×

目に見えるこの世の華やかさだけを求め、それを得ても、すべてはひとときのことです。老いを迎え、没落に遭遇するとき、人は思い知らされます。しかし神の知恵を得るものの道は揺るがない喜びを見、平安の内に人生の山河を進み、死をものり越えて行くことが出来るでしょう。

柔らかな応答

松下昌義

柔らかな応答は憤りを静め
傷つける言葉は怒りをあおる。
知恵ある人の舌は知識を明らかに示し
愚か者の目は無知を注ぎ出す。

―旧約聖書箴言十五章一節以下―

対話や議論が感情的になると、もはや、それは対話でも議論でもなくなります。本来、対話や議論は積極的な良きものを生み出すためになされるものでしょう。

感情的な対話や議論は、「ただの喧嘩」であり、「争い」に過ぎず、そこから生じて来るものは破壊的な怒りや怨念だけです。

× ×

対話や議論を良く進めるための秘訣は、「やわらかな応答」です。柔らかな応答は「感情的緊張を取り除き」ます。

柔らかな応答は優しさであり、愛が生み出すものです。それは喜びを造りだします。

正しく答える人には喜びがある。
時宜にかなった言葉はいかに良いものか。

―十五章二十三節―

自分が語る言葉を、正しく受けとめ、正しく理解してくれる人を、誰もが求めています。正しく聞いてくれる人は、すでに正しく応答した人なのです。それが喜びです。

正しい答えをする人は、くちづけをする人だ。

―二十四章二十六節―

× ×

自分の思いだけで語り、自分の思いだけで親切にする。そこには、自分だけがあって相手がいません。それは、独りよがりです。

聞くに早く、語るに遅く、怒るのに遅いようにしなさい。と勧めたのは新約聖書のヤコブです。聞くとは、相手を聞くことです。そのような聞くは愛です。互いにそのような聞き方が出来れば、その対話や議論は必ず愛を生み出すでしょう。

穏やかに語る舌は骨をも砕く（人を生き返えらせる）

―二十五章十五節―

× ×

柔らかに応答する知恵の人でありたいと願います。穏やかに語る平安の人でありたいと祈ります。喜びを生み出す対話が、夫婦の間で、親子の間で、友との間で、社会のここかしこに於て、なされるように祈りましょう。

求道の人よ
失望するな

松下昌義

疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。
―マタイによる福音書十一章二八節―

これは、とても慰めに満ちた言葉です。有り難い言葉です。でも、このイエスさまのお言葉の真意を知るとき、その慰めは倍加し勇気を持って生きる者へと変えられるでしょう。

このお言葉の真意は、「求道の人よ、決して失望するな」ということです。神さまの真実を求め、懸命に誠実に生きようと努力している人に対して「その生き方を私は支え、導き、必ず完成してあげましょう。」とイエスさまは語っておいでになるのです。

×　　×

世間は言います。「誠実に生きるなどと〝きれいごと〟を言うのは、世の中を知らない人だ。そんなことを言っていたら、この世の中一日も生きては行けない」と。たしかに、世の中とはそのようなところです。誠実に生きようとし、その重みに耐えられなくなり、疲れ果てて、多くの人達が挫折しました。その結果、この世に落胆し、人間に失望し、遂に居直り、適当に、程々に、上手に生きるようになった人達がたくさんいらっしゃいます。

そのような人々にイエスさまは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われたのです。

「休ませてあげよう」とは「雄々しく立ち上がらせてあげる」という意味です。

×　　×

神さまは、真実求めて、神に有って生きようとする誠実な人を、決してお見捨てにはなりません。一見、敗北のような結果になったとしても、神はその人を、決してお見捨てにはなりません。すべてを見、すべてを聞き、すべてを知り、すべてを感じておいでになる神の峻厳なる御手は、神の真実を求めて生きようとする者を、しっかりと掴み、その者が死んでも生きても、永遠に手放されることはありません。

最後に残るものは、人の智恵、人の富、人の権力ではありません。すべては消え去ります。しかし、神の確かな愛の御手だけは永久に残ります。

恐れるな、小さき群れよ。あなたがたの父は、喜んで神の恵みの力を下さる。……尽きる事のない富を天に積みなさい。
―ルカ福音書十二章三一節―

知恵に目覚めよう

松下昌義

知恵が呼びかけ、悟りが声をあげているではないか。高い所に登り、道のほとり、四つ角に立ち、城門の傍ら、町の入口、城門の通路で呼ばわっている。

「人よ、あなたたちに向かってわたしは呼びかける。人の子らに向かってわたしは声をあげる。浅はかな者は熟慮することを覚え、愚かな者は反省することを覚えよ……」

―旧約聖書箴言八章一節以下―

耳には聞こえず、目には見えず、手で触れることは出来なくても、「知恵」はそれ自身、ここかしこで働き、訴え、響き、呼びかけています。

耳を澄ましてみましょう。雑念を捨て、心に聞こえてくる真実の言葉を聞いてみましょう。

真実の「知恵」とは、人が学んで得るものではく、澄んだ心で聞き見て悟ろうとする者には、誰にでも知ることが出来る道理であり愛です。

すべてのものは道理を示し、愛で成り立っています。

神は、その道理の初めにわたし（知恵）を造られた。古の御業になお、先立って、永遠の昔、知恵は祝福されていた。大初、大地に先立って、知恵は生み出されていた。……神の御もとにあって、わたし（知恵）は巧みなものとなり、日々、神を楽しませるものとなって、絶えず神の御前で楽を奏し、神の造られたこの地上の人々と共に楽を奏し、人の子らと共に楽しむ。

―八章二十二節以下―

× × ×

今の時代は、事物についての知識はあっても、肝心の「知恵」が欠けています。物事についての理屈は知っていても、人は「知恵」を知りません。

宗教は「知恵」を示し、信仰は「知恵」に生きるはずなのに、当の宗教までが、「知識」の事柄に堕してしまいました。

人の肉体はただ感覚的な欲望を満たすことを求め、人の魂はただ知識をふりかざし、「知恵」を求める己の内なる霊の渇望に無関心でいます。このような世は自滅して行くだけです。

わたし（知恵）を見いだす者は命を見いだし、神に喜び迎えて頂くことが出来る。わたし（知恵）を見失う者は魂を損なう。わたし（知恵）を憎む者は死を愛する者。

―八章三十五節以下―

安定のある人生

松下昌義

何を守るよりも、自分の心を守れ
そこには命の源がある。
曲がった言葉をあなたの口から退け
ひねくれた言葉を唇から遠ざけよ。
目をまっすぐ前に注げ
あなたに対しているものに、まなざしを正しく向けよ。
どう足を進めるかを計るなら、あなたの道は常に確かなものとなろう。
右にも左にも偏ってはならない。
悪から足を避けよ

―旧約聖書箴言四章二三節以下―

何を守るよりも心を守れ、と箴言は勧めます。これは人生に於ける最も大切な心得です。

ここで言う「心」とは、知性と意思それに感情をも含めたもののことです。知性と意思力そして感情とをバランスよく守る為には深い智慧が必要です。その智慧は、この世で教わる知識としての知恵ではありません。この世で得る知識としての知恵は、人を本当の幸いへ導いてはくれません。私たちの知性と意思と感情とを、バランスよく守り働かせる智慧は、その人が神に対して畏敬の念を持つ時に与えられるのです。

神を畏れることは智慧の初めである。

―箴言一章七節―

× ×

新約聖書は智慧を得るための方法を次のように教えています。

あなたがたの中で智慧の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば与えられます。いささかも、疑わず、信仰を持って願いなさい。

―ヤコブの手紙一章五節以下―

× ×

その確かな智慧を得るとき、口（語ること）も目（見ること）も、足（行動すること）も、自然に確なものとなってくるのです。

ヤコブは続けて次のように忠告します。

疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、神から、何かいただけると思ってはなりません。心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人です。

どの人も、智慧を神さまから頂いて安定のある人生を生きていただきたいと願います。

感謝して拝するのみ

松下昌義

神よ、あなたはわたしを究め　わたしを知っておられる。
座るのも立つのも知り　遠くからわたしの計らいを悟っておられる。
歩くのも伏すのも見分け　わたしの道にことごとく通じておられる。
わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに
神よ、あなたはすべてを知っておられる。
前からも後ろからもわたしを囲み　御手をわたしの上に置いていてくださる。
その驚くべき知識はわたしを越え　あまりにも高くて到達できない。
天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身を横たえようとも　見よ、あなたはそこにいます。
御手をもってわたしを導き　右の手をもってわたしをとらえてくださる。

―旧約聖書　詩編一三九篇―

人は人だけを見てことを計ります。人の目から自分を覆うことで、自分の安心を得ようします。

しかし、わたしを究め、わたしのすべてを知っておいでの方がいます。とても恐ろしいことです。でも、は有り難いことです。

自分を包み隠そうとする者にとっては恐ろしいことです。しかし、善くも悪くも、ありのままの自分を知っていて下さるお方がおられることは、有り難いことです。何も隠さず、力まず、つくろわず、いいかっこをしないで、そのままの自分で居れることは有り難いことです。

そのお方の前では素直になれます。くどくどと弁解なしに、「すみません」と謝れます。「よろしくお願いいたします」と言えます。「分かっていてくださって有り難うございます」と安心できます。孤独から開放され、生きる勇気が生まれて来ます。

わたしのすべてを究め知っておいでになる方は、愛の御手でわたしを導いてくださいます。聖く力強い御手でわたしを守っていてくださいます。その御手は、わたしが何処に行っても変わることがありません。それ故に、わたしは生死を安心して生きることができます。ただ感謝と賛美の礼拝をささげるのみです。

幸いな人

松下昌義

ハレルヤ
わたしの魂よ、神を賛美せよ
命のある限り、わたしは神を賛美し
長らえる限り　わたしの神にほめ歌をうたおう。

―旧約聖書　詩編一四六―

このように神を賛美出来る人は、なんと幸いな人でありましょう。

彼は、神を身近に覚え、その日々を生きています。彼は神と共に起き、神と共に働き、神と共に床につきます。彼は寝ても起きても神と共です。

彼は苦しみの時に祈り、喜びの時に感謝し、失敗の時に神のみ声に耳を傾け、失望の時に神を見上げて立ち上がります。

彼は何処にいても、どんな時にも「ハレルヤ」―神を賛美せよ―と声たからかに歌います。

×　×

彼は自分の魂に何時もやさしく語りかけます。

「わたしの魂よ、神を賛美せよ」と。

彼は、神に「わたしの神」と親しく呼びかけます。彼にとって神は、すべてを見、すべてを聞きすべてを感じ、すべてを知っておいでになる「わたしの神」なのです。

昨日の自分も、今日の自分も、明日の自分も、隠れた自分も、現れた自分もすべてを知りつくしておいでになる神と、彼は共です。

何も隠すことなく、なにも繕うことなく、そのままの自分を神の腕に委ね、そこで安心するのです。

彼は、許されている自分を知っています。自分が成長することを待っていて下さることを知っています。神が限りなく愛であることを知っています。だからこそ彼は声たからかに賛美します。

「ハレルヤ―神をほめたたえよ」と。

だからこそ、彼は自分の魂にかたりかけます。

「わたしの魂よ、神をほめたたえよ」と。

×　×

彼の賛美は、一時ではありません。命の限りです。長らえる限りです。この世に在っても、かの世に在っても、永遠に彼の賛美はたえる事がありません。「わたしの神」のご愛が永久に変わることがないからです。

神を賛美して生きる人には死はありません。その人は永遠に神に生きる、幸いな人であります。

熟慮と反省

松下昌義

人よ、あなたたちに向かってわたしは呼びかける。人の子らに向かってわたしは声をあげる。
浅はかな者は熟慮することを覚えよ。
愚かな者は反省することを覚えよ。……
銀よりもむしろ、わたしの諭しを受け入れ、精選された金よりも、知識を受入れよ。知恵は真珠にまさり、どのような財産も比べることはできない。
―旧約聖書箴言八章四節以下―

熟慮と反省、これこそ智恵ある者の智慧であります。

わたしたちは自分の浅はかな言動によって人を傷つけ、自分の愚かさをさらけ出すことがあります。「もっと、よく考えればよかった」と後悔します。

浅はかさから人を救うのは熟慮であります。熟慮とは、時間をかけ、いろいろな側面から深く考える智慧をはたらかせることです。

× ×

反省を欠いた人の言動には、成長も成功もありません。他人を見るような思いで、自分自身を眺めて、その可否を考えることが反省ということでしょう。そうするとき、他人を恨むよりも、自分の愚かさが見えて来るものです。

× ×

落ち着いて、熟慮し反省しましょう。みだりに怒れば、人を困らせ、自分も不愉快になるでしょう。それは神に背くことになります。憤りを覚えているときには、言葉も行いも制止することです。さもないと、とりかえしのつかない結果をうんでしまうことがあります。一日か二日待ってから語り行おう。

× ×

自分が言った事を、優しい口調で落ち着いて言いなおしてみることは大切です。言いすぎた言葉が分かり、言いたりなかった言葉が明らかになるでしょう。優しい口調は人のこころに届き喜びをあたえます。しかし、とげとげしい言葉は、人を悲しませ、不安を与え、怒らせてしまいます。

× ×

熟慮し反省する者の言動は、喜びと愛とを生み、希望と勇気とを与える。そのような智慧は金銀にまさり、どのような財産も比べることはできない。これこそ、信仰があたえる智慧であります。

知恵が呼びかけている

松下昌義

知恵が呼びかけ
英知が声をあげているではないか
高い所に登り、道のほとり、四つ角に立ち
城門の傍ら、町の入口
城門の通路で呼ばわっている。
一人よ
あなたたちに向かってわたしは呼びかける。
人の子らに向かってわたしは声をあげる。
浅はかな者は熟慮することを覚え
愚かな者は反省することを覚えよ。
―旧約聖書箴言八章一節以下―

神を畏れることは知恵の初めであり、無知な者は知恵をも諭しをも軽んずる。と箴言は教えています。―一章七節―

漢字の「知恵」が本来どう言う意味のものかは知りませんが、わたしはいつもそれを「恵みを知る」と読んでいます。

つまり「知恵」とは、神の恵みを知ることであり、そのような人を本当の智者だと思っています。知識は人を誇らしめます。しかし、知恵は人を謙虚に導き、愛の人に変えてます。なぜなら、知恵の人は、人はすべて神の恵みによって生かされていることを知っているからです。

また、本当の知恵ある者は、人が弱き者、傷き者、欲な者、卑しき者、死すべき者である故に、自ら誇ることが出来ない者であることを知っています。だからこそ、知恵の人は、神の恵みを仰ぎ、感謝し、祈り心をもって生きるのです。この世だけに目を注ぎ、自分の力に依り頼み、感謝も祈りも知らぬままに生きる人々に、箴言は警告するのです。

浅はかな者は熟慮することを覚えよ
愚かな者は反省することを覚えよ。

人が何処から来て、何処へ行くのか。なぜ、この世に生を得たのか。生きていること、生きて来たことの意味が何であったのか、と言うことに気づかずにこの世を去るなら、その人の人生は無に等しくなるでしょう。

× ×

知恵がいたる所で、私たちに呼びかけ、さまざまなかたちで訴えています。

「あなたは、大いなる命によって創造され、保持され、完成させられる者なのだ」と。

友よ、有り難き自分の人生に目覚め、神に感謝しつつ生きようではないか。

隠れた現実がある

松下昌義

人の歩む道は神の御目の前にある。
その道を神はすべて計っておられる。
神に逆らう者は自分の悪の罠にかかり、
自分の罪の綱が彼を捕らえる。
諭しを受け入れることもなく、悪なる愚
行に狂ったまま、死ぬであろ。
―旧約聖書箴言五章二十一節以下

「『神が何を知っていようか。いと高き神にどのような知識があろうか』。見よ、これが神に逆らう者、とこしえに安穏で、富をなしていく」。
―旧約聖書詩編七三編十一節―　何時の世にもこのように嘯く人がおり、彼らは富を成して生きています。まぎれもなく、これも現実の姿であります。しかし、もう一つの隠れた現実があることを忘れてはなりません。

隠れた現実を知っている信仰の人は、次のように告白します。

「神よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておらる。座るのも立つのも知り、遠くからわたしの計らいを悟っておられる。歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる わたしの舌がまだひとことも語らぬさきに、神よあなたはすべてを知っておられる。前から後ろからわたしを囲み、御手をわたしの上に置いていてくださる。そのおどろくべき知識はわたしを越え、あまりにも高くて到達出来ない」―旧約聖書詩編十九編一節以下―

× ×

人生は多面であります。命の営みは様々な現実を生きているのです。私たちが見えている人生の様子は、わずかな部分にしかすぎません。しかし、自分の見ているそれを、唯一の現実と思い込んでいます。ましてや、命の営みの現実は不思議に満ちています。それにもまして、不思議な現実が厳然とあるのです。それこそ神様が見ている現実であります。

× ×

人の道はすべて、隠れた現実に計られています。人が人生で決断する一つ一つの結果は、計られたところにより必ず自分で刈り取るのです。人は結局、自分の決断の結果の綱に自分自身で捕らえられ、自分が作った罠にかかることになりましょう。まさに、重なる愚行に狂ったまま、滅んで行くとしたら、その人の人生は悲惨であるといえましょう。

沈黙をもって聞く

松下昌義

焦って口を開き、心せいて、
神の前に言葉を出そうとするな。
神は天にいまし、あなたは地上にいる。
言葉数を少なくせよ。……
夢や空想が多いと饒舌になる。
神を畏れ敬え。
―旧約聖書コヘレトの言葉五章一節以下―

×　×

言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です。また、舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。
（ヤコブの手紙三章）
禍福は胸懐より出て、栄枯は口吻より生ず。とは古い中国の教え。さらに日本にも、言葉多ければ品少なし。という故事があります。「品」とはその人間の品位のことです。

×　×

たしかに、人間関係は互いに語る言葉で結ばれ、壊れもします。言葉を語ることの大切さを知ることは、他人のことではなく、自分自身のことでもあります。

×　×

聖書にあるコヘレトは、言葉を語るということを、人との関係でなく神との関係で問題にしています。彼は言います。「焦って口を開き、こころせいて、神の前に言葉を出そうとするな」と。

私たちはあまりにも軽々しく、畏れなく神のことを語り、神について論じます。そればかりか、自分の考えや思い、権威や権力を守り誇示するために神を持ち出し、もっぱら自分の為に利用します。その代表格が「宗教」だと言えましょう。その意味で、宗教は神や仏について、あまりにも多弁であるとも言えます。その結果、宗教が神について多弁になればなるほど、神から離れて行くように感じます。

×　×

神に目覚めればめざめる程、神に対して人は沈黙する者となります。その人は「神は天にいまし、自分は地上にいる」者であることを知るからです。神を畏敬するとはそういうことだと思います。

×　×

夢や空想が多いと饒舌（おしゃべり）になる、とは本当です。現代人はますます、自分の能力、技術、考え、思いなどを誇り、饒舌になりすぎ、神の領域まで口を出し、手を出し、その結果、人間の品位を自分で辱め、自滅を自分に招いているようです。神に対する人間の饒舌の愚かに人が気付いたときには、すでに時遅し、にならなければと自戒しています。

「ご覧なさい。どんな小さな火でも大きな森を燃やしてしまう。舌は火です。舌は不義の世界でわたしたちの身体機関の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼き尽くし、自らも地獄の火によってもやされます。」（ヤコブの手紙三章一節以下）

謙遜の知恵を

松下昌義

不遜な者を諭しても侮られるだけだ。
神に逆らう者を戒めても自分が傷を負うだけだ。
不遜な者を叱るな、彼はあなたを憎むだろう。
知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
知恵ある人に与えれば、彼は知恵を増す。
神に従う人に知恵を与えれば、彼は説得力を増す。
神を畏れることは知恵の初め。
聖なる方を知ることは分別の初め。
知恵によってあなたの命の日々も、年月も増す。
あなたに知恵があるなら、それはあなたのもの。
不遜であるなら、その咎は独りで負う。

―旧約聖書箴言三十章七節以下―

「不遜」とは、思い上がって相手を見下す態度のことです。したがって、偉そうな態度、無礼な態度を意味する「横柄」と同じことでしょう。

「不遜で横柄な人」にはなにを語っても侮られるだけだと箴言の人は言います。おそらく、そのようなことをたくさん見聞きしただけでなく、自らも体験した結果の言葉なのでしょう。不遜の極みは神に対する畏れがないということです。しかし、自ら謙遜の知恵を持っている人は不遜から救われます。

謙遜の知恵を持っている者は、多くを学び、多くの善きことを受け、自分をますます豊かにし、遂に平安を得るでしょう。謙遜の知恵の極みは神を畏敬する生き方です。神を畏れることは知恵の初めであり終わりでもあります。まことに、その知恵によってまことの平安を得え、その年月は永遠につらなる希望と喜びに生きることができるようになりましょう。

不遜と横柄とは周囲に悪想念をまき散らし、怒りと悲しみと争いとを起こします。しかし、自分ではそのことに少しも気づいていません。

しかし、謙遜の知恵に生きる者は、喜びと希望そして和らぎを人々の中に生み出します。しかしその人は自分を誇ることはありません。

やがて、不遜な者はその咎を神の前で独り負うことになり、謙遜の知恵に生きる者は神の前でその実を楽しむことになるでしょう。

自分を深く省みる

松下昌義

北風は雨をもたらし、
陰口をたたく舌は憤りをもたらす。
いさかいの好きな妻と一緒に家にいるより
屋根の片隅に座っている方がよい。
渇いたのどには冷たい水、
遠い地からの良い便り。
泉が踏み汚され、水源が荒らされる、
神に従う人が神に逆らう者の前によろめく。
蜂蜜を食べ過ぎればうまさが失われる、
名誉を追い求めれば名誉は失われる。
侵略されて城壁の滅びた町、
自分の霊を制しえない人。
―旧約聖書箴言二十五章二三節以下―

この箴言には「神」なる文字は直接に出てきません。が、人間の在り方の大切なことが語られています。

何事でも陰口をする者は、北風が寒く冷たい雨をもたらすごとく、人の心に不快をもたらし、憤りと争いとをもたらします。

言い争いが、日常茶飯事に繰り返される家庭に居るより、貧しくとも屋根の片隅にいる方が幸福であると言うのは本当です。

友が遠方より来ることは楽しい事です。心にしむる便りを遠くより受け取ることは、安らぎと希望と力とを与えられます。

水源の汚染は大切な水を駄目にしてしまいます。信仰の人も、ときに神に逆らう人によって惑わされることがあります。

何事でも、すぎたることは、安定を失わしめ異常をもたらします。いつも正しい間隔を持って歩み関わるとき、真実を見失うことはありません。

自分を弁えず、自制する知恵に欠けた者は、自らを滅びに導きます。

× ×

神を畏敬し、信仰を持つということは、人生の深い知恵をいただくことであります。その意味で神を習うことは自分自身を習うことであり、それは結局人生と世界とを永遠の相から、しっかりと見て、自分の今、今を生きる事だと言えます。

「箴言」を読んでいますと、ただの「道徳訓」のように思われる、その一つ一つの言葉の奥に、永遠的な知恵が隠されてあることに気づきます。大切な事が何であるのか、自分の在り方を深く省みたいと思います。

人の愚かは変わらない

松下昌義

買う者は、「悪い、悪い」と言う、
しかし去った後、彼は自ら誇る。
金もあり、価の高い宝石も多くあるが、
尊い器は知恵深い唇である。
欺き取ったパンはおいしい、
しかし後にはその口は砂利で満たされる。
歩きまわって人の善し悪しを言う者は秘密を漏らす、
軽々しく唇を開く者とは、交わるな。
自分の父母を罵る者は、
その灯火は暗闇の中に消える。
初めに急いで得た財産は、
その終わりが幸いでない。
「私は悪に報いる」と言ってはならない、
神を待ち望め、神はあなたを助けられる。
人の歩みは神によって定められる。
人はどうして自らその道を
明らかにすることが出来ようか。
―旧約聖書箴言二十章十四節以下―

箴言を読んでいると苦笑してしまう。そこには、自分の醜さが示されてあるからでしょう。それにしても、この「箴言」が編集されたのは紀元前三〇〇年頃だと言われる。とするとそれ以前から語り継がれていたものであるなら、今から二千五百年前からあったものです。ならば、科学技術の進歩には天地の差があっても、人の心は現在と少しも変わっていないことを知ります。およそ、人間が進歩したなどと言えたものではありません。何時までも、私たちは欲に汚れ、自ら地獄への道を歩き続けている者だと痛感します。

× ×

私たちはどのようなことがあっても、誰も自分を誇る事などできません。所詮は見栄っ張りの「我利我利亡者」です。

しかし、「人間は進歩した。豊かになった」という。多くの知識が氾濫し、「人間は賢くなった」と思い込んでいる。それは外見だけ。表面だけ。心は、動物にも劣る「獰猛な欲望」に振り回される罪人です。

「神を畏れることは知恵の初め」と箴言は冒頭で教えています。これは人間が人間らしく救われるための、ただ一つの知恵の教えでありましょう。

神を仰ごう。神に目を向けよう。神は助けて下さいます。

陰口を言う者

松下昌義

木がなければ火は消える。
陰口を言う者が消えればいさかいは鎮まる。
炎は炭、火は木、争いを燃え上がらせるのはいさかい好きな者。
陰口は美味しい食べ物のように呑み込まれ、腹の隅々に下って行く。
唇は燃えていても心に悪意を抱いている者は混じりけのある銀で覆った土器のよう。
唇をよそおっていても憎悪を抱いている者は腹に欺きを蔵している。
上品な声を出すからといって信用するな、心に七つの忌むべきことを持っている。
憎しみはごまかしても隠しても　その悪は会衆の中で露顕する。
穴を掘る者は自分がそこに落ち、石を転がせばその石は自分に返ってくる。
うそをつく舌は憎んで人を砕き、滑らかな舌はつまずきを作る。
―旧約聖書箴言二六章二二節以下―

この箴言には自分の心が痛みます。だれ彼のことではなく、ほかならぬ自分自身のことだからです。うわさ話ほど耳に心地よく、内に染み込み、顔突き合わせて囁き合えるものは他にはないようです。しかし、それこそ地獄。わが身を汚す最短の距離です。そこからは善きことはなにひとつ生まれず、暗い想念だけが増幅し、空しい自己満足が残るだけです。

陰口を囁く首謀となってはならない。その場所に自分の身を置くことから逃れる術を心得ていよう。

×　　×

憎悪を内に持ち続けてはなりません。憎悪を預けることが出来る方を自分の内に持とう。憎悪は捨てきれません。しかし、それを預けることが出来るお方を見つけだすことはできます。それは目に見えない神様です。すべて苦労と重荷とをわたしのもとに持っていらっしゃい，と優しく語って下さる神様のもとに、すべての憎悪をお預けしましょう。憎しみや欺きを自分の内に詰め込んでいながら、笑顔をつくることは愚かなことです。心から笑えるのは、すべてを見て知って、聞いて感じておられる方に、お預けするときです。

すべての業は、それに相応しくその人に必ず返ってくる不思議があることを忘れないでいよう。

足下に確かな命を観る

松下昌義

なにゆえ、国々は騒ぎ立ち、人々はむなしく声をあげるのか。
なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して神に逆らうのか。
「我らは、枷をはずし、縄を切って投げ捨てようと」と。
天に座する方は笑いたまわん。

―旧約聖書　詩編　二篇―

大局的な見地から物事を観る人は幸いです。

「大局」的に観るとは、物事を全体的に見渡すことです。

「局」とは、仕切ることですから、大きな大きな枠組みから、物事を観ることが出来る人は決して目の前の損、得、快、不快に惑わされないでしょう。貪欲に、こせこせと、ちまちまと目先の事柄に踊らされますと、必ず後になって悔やむことになります。

×

また、大極的な見地から物事を観る人は幸いです。「大極」的に観るとは、万物が生じる根源から物事を観ることです。

「極」とは、窮まりです、即ちそれ以上にはならない、という事ですから、万物が生ずる根本から物事を観る人は、大事に至ってうろたえ騒ぐことはないでしょう。宇宙の根源の大いなる命の働きを見据えている人は、表面的な事柄にまどわされる事はなく、〃でん〃としているでしょう。表面のことがらにまどわされる人は、いつも不安でいなければならないでしょう。

×　×

いつも、こせこせ、ちまちま、うろたえ騒ぎ立て、愚かな知恵を振り回し、小さな身体で虚勢を張って生きている私たちの姿を、「天に座するお方は笑いたまわん」と、この詩の人は言います。

信仰を持つということは、大極的見地に立つ智慧をいただき、その智慧でもって物事を大局的に観る眼力を身につけることです。

うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行っても、あなたの神、主は共にいる。

―旧約聖書　ヨシュヤ記一章九節―

友よ、私たちは弱く儚く愚かです。しかし、確かなる命の滾りが、私たちの足下にあり、私たちを生かしていることに目覚めよう。

罪と罰

松下昌義

落とし穴を掘るものは自らそこに落ちる。
―旧約聖書コヘレトの言葉十章九節―

「天に向いて唾を吐く」という諺があります。それは、人に害を与えようとして、逆に自分がひどいめにあうこと、という意味ですが。この言葉の出典は中国の四十二章経にあり、そこにはつぎのように記されてあるそうです。

「悪人、賢者を害せんと欲し、天を仰いで唾するなり、唾、天を汚さずして、還りて己が面を汚す」と。

× ×

ひょっとすると、誰もが、同じようなことをした覚えを、自分の内に密かに持っているのかも知れません。

若いころには、このような諺は、人間が悪いことを行わないためにつくられた、ただの道徳的な教訓に過ぎないと思っていました。しかし、なにがしかの行いをしつつ、人生を生きて来た今に至って、このような諺は、ただの教訓ではなく、人生の見えざる事実の一面をそのままに語っていることだと思うようになりました。

× ×

人生は、見える世界だけの事ではなく、見えない大いなる命の働きにより保たれ生かされているようです。

旧約聖書の詩編に次のような祈りの言葉があります。

神さま、ご覧ください。彼らは悪をみごもり、災いをはらみ、偽りを生む者。落とし穴を堀り、深くする。仕掛けたその穴に自分が落ちる。災いが頭上に帰り、不法な業が自分の頭に降りかかる。正しくいます神にわたしは感謝をささげ、いと高き神、主の御名をほめ歌います。
―詩編七章十五節以下―

× ×

人は誰でも密かな罪を犯します。考えて見ると人生とは、謝りつづける日々なのかも知れません。だからこそ、密かなる罪の何であるかを、よく心得ておかねばならないのです。「罪と罰」とは旧約聖書に於いては、一体のことだと研究者は教えています。つまり、罪は罪、罰は罰というように別々の事ではないというのです。罪の中に罰が内在しているというのです。

だからと言って、罰を恐れるために罪に悩むことは愚かなことです。先の詩編の人は、その最後に「正しくいます神に私は感謝をささげ、いと高き神、主の御名をほめ歌います」と、歓喜の祈りをささげています。

罪を犯すか否か、悪を思うか否か、ということではなく、大切なことは、この世界、自分の人生は見えない神の恵みに満ちた命の働きの内に保たれて、完成して行くのだと言う事実に開眼する事です。これこそが信仰の知恵であり、信仰人が得る生きる希望と力の源なのです。

みちしるべ文庫　二三
『幸いな人』
二〇〇〇年五月二一日発行
著　者　松　下　昌　義
発行所　左京キリスト教会
京都市左京区下鴨南茶の木町二九
電話（〇七五）七八一－九六四〇